対象作品／小林快次著『ぼくは恐竜探険家！』講談社

やっぱり何でも勉強につながる

弘前大学教育学部附属中学校　鷺坂祐将

もうこの世にはいないが、ぼくの尊敬している祖父が昔、本屋で一緒に買ってくれたＤＶＤ付きの恐竜図鑑を見た時から、ぼくは一時期恐竜にあこがれていた。その大きさや、強さはもちろん、その種類により特技がそれぞれ違うのだ。もちろん、現在は存在していないのだが、二億年弱も繁栄していたことに感動した。その頃、博物館とかに連れて行ってもらって、その姿でさらに感動したことをこの本を読んでいくうちに思い出した。

ただ、この本は恐竜学者の小林さんが、どのようにして恐竜学者になったかということも書いてある。題名は『ぼくは恐竜探険家！』という。この本を読んでいくうちに恐竜のことよりも、どのようにしたら恐竜学者になれるのか？いや、ぼくにとってはまだ、将来になりたいものを決めていないため、どのようにしたら将来につながっていくのかということを改めて考えさせられた。

恐竜学者になりたいと思ったとき、何を勉強すればいいのか、という質問に対して小林さんは、なりたいのならどの教科も楽しんでやれとアドバイスしている。ぼくは、色々なことに興味はあるけれど、勉強が楽しいと思ったことはない。なぜ、楽しいという感覚が生まれるのかがわからない。なぜ、楽しいと思えないのか考えた。それはつまり点数が取れないからではないかと思う。だからやる気をなくすし、点が低いからダルいとしか思えないし、ダルいといえば、母に怒られる。だからしっかり勉強しろと言われても、面白くないのだから勉強に身が入るわけがない。

しかし、ぼくには好奇心だけは人一倍あると思う。それに体力もあると思うので、何かしらはできると思うのだが、そのためにも勉強が大事だと言われると辛い。

恐竜を発掘する、そして研究をすると一言でいっても、多くのことを勉強しないとならないようだ。ただ、掘ればいいだけではない。現地の人ともコミュニケーションをとらないといけないし、その場所の危険な生物について、環境につい

ても学ばなければならないし、盗掘されないように工夫もしなければならないし、地層についても勉強しなければならない。先に成し遂げた人の後をやっていてもだめなので、本当に努力や勉強が必要らしい。そして、発掘した後も、クリーニングという骨をきれいにすることや、年代や当時の環境を分析することも大切なのだ。

本当に、人生は勉強だらけらしい。いつになったら勉強しなくてよくなるのかなと思う。けれど、勉強は一生ものだと、そういえば祖父が言っていたなと思い出した。大きくなって、自分の好きな仕事についていたら、勉強は楽しいぞ、とも言っていたな。

恐竜学者の小林さんは、英語力を効率的にマスターするために、単語と読みと会話を徹底したとある。一日十個の単語を覚えたり、英語の小説を辞書を使わずに読んだり、ニュースやドラマを復唱するということをしたそうだ。そういえば、ぼくも母によく言われる。英語は声に出して書けと。書かないと覚えられないらしいが、だけど、こんなにもつまらないこと、ぼく自身はできていない。やる前からダルいとあきらめている。しかしその結果が、点に結びつかない。

どうやったら勉強が楽しくなるかな。テストの点数取れるかな。テストの点数を取るだけでいいのかな。

最後にもう一度考えた。祖父は勉強が本当に好きだったのかな？祖父は生涯、大学の先生だった。専門分野はもちろん、他の事もいろいろ興味を持ってやっていた。ぼくは祖父似らしい。さらに、人一倍いろいろなことに興味はあるから、遊びも部活も、そして勉強でも今は我慢して続けてさえいれば、もしかしたら、今後はどこかでやる気があがり、今より勉強が楽しくなるかもしれないと、そう思った。そのことを楽しみに今まで以上に、まずは興味があることに突き進めるように努力しようと思った。